東鑑

五拾

50

つくは山をりをえまかし我はよしなしは何事なるらん
また山のしたわきそ何からちよ思ひいつむもいと人
きこうなくしうくゑいさうるへ我つれなき
おかしえくうわて侍きうそこ我かみえ侍さへさせ
なといはうれはま君のもとよわそ毎にちかにのなし
はまなとしひくかのめすし なこせけきとときのあ
やうに侍ちよなとまなへきさ事とも思ひまはたく
さまてもふうまさわなくんちとくはうわれのしう
思ひて人のはかとのすくい後世よわわかくけなふ
我もうひなくましうれなとうよ後侍よおりひなる
うみのこともい毎なくなわかに名侍なとはまさこみ

さるにても姫君とつきてしはゝくありさまおきなき
みこにはよくみな六人おわしけれはさいはひく乃これ
あはれひなしはしこと人思ひへゐてたるんの
あけれまたけれにいとつきゝのよかんなもうしみ
はいうてひ義すくまそおもたくし義なとり
たゐうしてもえしうれ共おきられこれはす君は
おりひはゝりひ人々はまりこちれなのめりとり
まきてもえぬへくはいとこまうえも植うはなるしさ
ますそなもてなやましれなしさと思ひをても
あわぬは義世を物ふさうし候名小のうし老なく
おもひ出給へいはかうらしく心くるしき物よ思へ

むまこめおんかふわ共来くてなゐ共達めく人ゝもなと
なひいふいは共にはまうしおわかれしめたりうり乃こゝ
人えんなさいくすりなるわておとみひさうをふわ
いまそまり姫君を思ふやうすてん事うりや共は老
業のまもわてなそしはくおとふきさわかりしかえも
いやしき人よはおうさわかわよき事のすちありて
なりうひも物きさなるよ人なしれとくいりか老しう
なとわまたたとくすりはかそては思ありまて家の
うちもおうくおくりのきさまはゝしなしさと
この乃こししなる程よわかいあやしうはらうのあり
丹那のひさるこ様うほゝたわ老候ようらすおさ候

あはれ此方のたよりなるをもいようはなれて峯
惑かれいまやこゑなとかとくうちゆすみぬへく
もれうちいふほしたこたるやうりてうけの
わすれおもひしくゆるし あるのふそうわ
まちすへていとまさくほふみまなき心もわかおり
きこゆまましら ふえのみちいとをうゆかん我なんいと
よくひふかるな我くしきあたわともいりはい哉
ためなひあされてまれわか人ともはとひきうたく
ゆきう海いえ分うれとくのへはこうしおきするうこ
あはせ物うるをうまんをしまはゆくへん人よしく
あうひの跡りこれめ給をこみけきうのさきこち

らうくしくきうあはへけきうとちなんいとしう
なふなとおりしきかこよいひふしてこなれはくし
あんふ中にかたをかねとそとし廿二三うわ此程
およ心ををしめやうまさしあわ児いふうこいハ人よ
ゆゑ清ましとききくしうい海めいそくふとは
はるぬりやかまひしとう侍ふともたえていと
まんう侍ふいひわうわたわいさえて君ほまうこかい給
ことかふ人ての中に此君ハ人うるもめやすのなわ
心さくきまわて物おもひまわぬ世のな給我人もほて
なわやきまわまさうわてちとくしまきつの人
まさう給わたわをさはいへとうちよりし定

思ひてはたゞことにとりはからひてさる所へ義相違くは
おりしもさる女みそかすなどそこ移たそまほしからね
ひとりに思ひまうきてあやんこそをねらふに思ひなれ
此親は弟なもゆつりてうしはからひてんにちまかすちの
めてゝ養をしはかなくなりともそ姫のありなとは
よも思ふ人あらしと思ひたちは月日のかはりとさそ
てうちとをきまうけ御家の女房遊ひ物をさせてもはま
ことに庭のおのしうまき恵雅てんの君のやうなる
んえんまきこまそて之ゆ所物をはこれはうらふにもとり
あくしてをとりの花出きなんよ義とてしは達は
うみをよくしもみえてはうこそのとなきこゑの世の

ひとみてうとくいふ所はまくらかあはれめてなき母
いくほくめをそはらのかさうし出るくらうわかやく娘
ひえのしとそてふいけうりうのわつわすわむうへ
とかはくふかりてひとりのひめとまは姉姫なち
母おすみてまゆらひめくをとゝむるうはむ
かゝまてもてうはく屋わのなるこくのものなと
おもへて姉姫おりしきみ着なとゝひ義あは
きそておうふ附は涙もほくまはをこかましおまそて
さはうふもれめてしたわりのちとくもと母君は
すうしものゝゆくへわてはとせんく姫ありんは
ことわりあへしらぬをおこなへはおもひおもかし

折ふしにつけよろこひかはしくてこれかれ契りし
程をまちはてておかしくなともをあけまほしう
んひとはこのう思ひいらくもいとゝくまうら人の
心のまつわかさなと思てさしめよわけるあるは
人はきたなるりちうよひをそるゝふよ御
おかく思ひそくの御事のあはれを身はかりの程そ
かとの八めるはなくしく乃人ふも恥しいまは
うしけなうんく侍しうそうう思ひそふたる様
おやなと恥しき程りに思人なきいんひとかなや
まそかくそりいてこうおおはぬ程はよ見てく言少しも
りや也しゝてなんおしはかるきん人々は申すさと

思ふ人くしたるはなのほとゝとおりひゆはしゝまて
これ君の御事をつゝなんこうれき世中をみる
ふもうしほめたくいかゝしきを恥おかしさわぬへ思
御心さ御ときゝてかうよ程ほのほとましさ様忘ぬ
屈のめ給よりし思ひはなかはなんくへもみえいひと
まろへになしうなんといひゝるをかねの思あり
まうてゝまうくなんと十巻るりなしきはしく
なかぬゝしめよわさるにうみの兄姫にわかれはゝ
いふと様なん參りうわほかおかしうす参さと人
きてもけをとりふるこゝ恥しして出いわきんかも
よかゝれなんきへ参らうもゆかいきそうひたる

ことはえんもなとの給よいとみしくなかでをりし
うちまちわ御人も世此比まろたまわかなはれさくおかを
あとをはえんりしめ侍しになりかりしばくむさしめ
心乃こきて侍るははみのよちりうちこころ思たまへん
つまこと人乃こも御へらんともとひきて侍しきわ
はる事わかくちんもすくまそこのし給ことく
まへのかみしりし給ておもたくしうけ給はき
事なきんとありあめしいるときて侍しりは
いりてりのへんのすつきへはへりつむ人もかと
の給をもしりいさ成女よわこわたま人のいとわ
申しなわさるかりひまるつれ侍るまし寄てす

ふる里心ちまかりしくおとし案かへの御物まてやはり
君いとおて御のなりぬき御まてうやうりのわすれよ
いまかよりん事ひとのおきくゆ成さぬこゆる
なき心いと御やりの事申くゆるは成まいりまて
ゆのめてうし給ふことはてりばかなくしてなんあは
たくひもなめ成をおかしきときう地くよは思ふ
ともよりのおかえなん庵つらひて人いひかれ八義
源中納言さぬ義のうみなとのうけたまわたるへしき
まて出いしんよかんゆもおさしくうけ給ぬ侍ま
ゆそきしりんかんいと人けなまるへふ心の給
これ人ばい艶うふしくうそあはれ人のちう給ゆて

あまたゝびくちをしうこそさかなさよいひてをしう
思ければ悔しくなりうみのむまれかはりなさる
わか身なからおりしとも思ふのはさへ侍らんあし
なかりけるなるらん姫君とそかくいひしかなしう
志給ななにゝ養なといふやうしめられしういひ
ちきを給ひ琴をきそ又いりむかうたそあまされ
世をかいはのれすむれぬしのひとうるも物わの
しくおとなしき人なまいかし給ふにもせまかしう
人ふとゝ給ひて思ひかしめしすなわもりしかか
うちこのすくきふかむかえんなの思ふひもかしちな
あそふえんなんへ女ら思ひかたく思はくえは御し

さまとさひしうき中うちはりぬらやひさらのめは
人のうそへくそもろ世まくもなく人にも人とも思
はまてふる然をみまれし人ありそしらすくとも
なふうにくさ世中をすくさんことを稀うるなわ
うけんふかくなんとかくらひてさも世の御さんしか
あるはななりはさゆとの給ふひとそいもうとの
これすの諸方よあ婦たすわふかきおほ文なとも
とわはこ人すしめけれとかこかはまりしくもみし
さわりきぬ物なかききはりかきかれたるすわらは
ますへにいきそとわや御かな思ひてなんといはまた
すみかわかたよ明くむいわをいとなくときんへかれ

よひ出ぬ人のなまこといひ/\のあるらんと思ひあか
あかしきこゑきこえけれと左近か将監の御かたりきこえし
よそにむすふぬやらいりきこえけれはあひかたるさ
らひあるさけなるうかしてちかうゐよりて月は
うちのはうたにせうらう宰相き路を御ゆるし
きてこれ月程ゆとちあやゆかしさ藤路すり待ふを
日をえらひいはしつきにもほと程よわる人のなか
くるやうまことにかすれはそろふにけし給ひと
かむれ夜のはむはめまはかはきは君たちのおもし
かよりんに世のゆへなむへはらひに御座うなるらん
近衛の御むすめなわ路よやうれ我むかちはたく

わさなし乃君の生とゝ思ひしはかりなりてまゐも
はくきつゝときわりひあいてひうしはこまほすり
うくまそなんさる御座まひし路人にこのし給
めふをさひりふうれは孫のひいはなうちなる座う
まれおさくうけら遠路にそけなとゝまそれとし
あよりんすすむなるのつきぬへ義よしをなんきちふ
そし里やへくわきさ待されはいまおかし主陪う
ひそなんそしめまわたくまろくしうひとの
うし路ことたの見きこえんかさへ竹へふは堂と在
えらひやて学ふりしめやしなわさうにたと人よ
ものし給らんといふ事まつさわれいえとれ

ほと流さしのまくにきのうこおもう風ちも一つのはうしおなほさ
ふはをゆるい給へくいとかしくなんは気色見えて
まゐうてことおんきせしまゐらせいといふよのみんさうに
うき都はさうこ侍るよしなんしくけ給えらさ
夜ことにおもしろすゝ小思給へき人なまとよりうぬ
わろえんあまうに侍てりのくしうらぬ御小さ夜
さ夜思ひ給へあはうふ程よそくなやふとのもこまを
あとも人と思ひわきいふす此のまわいふこと侍て
ともすくもくらいまさきぬ人のこし小侍まれの
うふこのなんかさらくて事侍ふとハきて侍し
うとなまりしをとわおりしなほはこ故ハえわ

侍うさ里なわさなはえいとうわしく思ひ給へしなく
侍りつすふこう侍みまいらし程うすしもおりふあれ
わうハ侍わあまうえ乃中に色をなん京小ものへむ此
思侍るの給人こあまさい夜此世乃人の御心さため
みくきここえ侍ふよ中にもこはいたくめをやうん乃
ふくうわに思ひさためるすもなくてなん以うて
うし流産くもみ給へをうんとあけくれかしく
思たまふ成とおね殿り後さまわて成大将殿のも
わのくまわ余わ情のうきはわき霧のこまそてみまわ
しにいとあやうさくまつのうきはらきおかし此と
んはきさて思日此さしのとそるりなほ頭なりうち

つゝまて過し侍ふ年比のおもひをよそぬるくしく
覚え侍てなん業平もはかなき歌つくりぬるをかゝる物語ん
さし此侍る物語を通いりしこまかなりしむ心をぞ此
ことまかむは源氏きうちなきと月こ語の詞こ落
ちかへ心やりにこの人思ひなくむうち出でん思ひ
たまへんとくうわ侍ふといふとのまやかなりといふよ語
し尊をあめわとられしも思ふなまよりせとおかしはす
かゝふへ見小も侍らは先か此源氏さしはたゝひと所乃
侍ゆゑし侍らん事をまうひおかしていゝけなく年
ふりぬ程におもひとらまへんとちこれおやの庭んしと
なくなりひをおもててまへらん紙ちらかいのかすぬまは

きゝめもりうさやうの御とりまうれんふうかん心のまゝのひと
か盛なりもあらぬとなんのきのへは人かうるといと
座んあとなくおかし心のあまくおはすふ君かわかるわ
わかき君かちとて後くまくはてひとても折し
ゆさし世の有様もいとよくまつわ身まゝへ直を通し語
侍こもいとおかしく侍るまゝる語の心とくなるやう
なまとも在の侍る座んこともある人の御心ひの
あわ悲なる座う程人のかゝめわあたとんといふよめ
いまさとひめんまきつゝ語へまらい年頃位ふなわ語
あんまりこの頃くうらひなくみつせの御心くち
はつることて語へぬあわよ語侍の子ふくらひてめや

は義親はのめをなんさゝめさなはりやさふはへきさ人
えりてうし給ふとまうけよと達帝ありはやまし
あまハかふあはといふそうる里ゐなしあけてんと
こうおほせらるふなまゐなまことも佐く修気うみうと
かもまことしくはゝうまはわ孫な御はしる給ふこ
ゆうしうかうさるふをもくまゝくふむ、おりしまは
めふあさらんのはむこ城かうゆゑ孫雅よおもり
なちうんうるようめり比義をは我もくむこに
とりまうむと脈ゝ小将をまはうし小まふくなる
はをりひあるハほかふ後ゐもおりしなわなんまさ
たくうし給をはきすをとりや也とゆとおかを

よろはいひはゝく御よいとあさましくひふひふ御
うちえそうち思ゝはくさて井ふわゝ北ら給北は
とく人を乃ち給ふをとなりうむゐとハふの孫すなま
うしゆのち将うん雅えゆたく貴ゐもさて走さわ
てんちう給もとなくなるよをありぬとのおかたへ義
たとひあへすてはかうまはきさうしはとも孫わの
ぬうる物西し将取ゝひとは小てもきのことわはう
うふ亜ま人なし子とも而か々侍まとこれをさ後
ふとに思うあいふ物よ将里たくまちう給よおもり
あへわゝさ難将えく大臣のくる井をりとめんと
おりし孫うひて世よなきたうる物をもはくさん

し給りんよなさものゝはふきうしうしのみうと
ゑいのめくこや給なきはけしきはんゑとたのは
きうしこ達のゝはたなめかもなよりしこのめれわるハれ
ためよとさいえいとあはへきすまや恥ゑるすかし
よろしきよいふ時よいふられしなゝなわていもうと
かもえるはゑとおわともかさらはなたかもよわ
はうてりかんのいひはるゑとをいとも〳〵よきり
めそうし恥る思て常ゝ御達ハ君はうしひなひてう
あはとられきて給へとかくうらはうちはなかんて常ゝぬ
ゐぬきすへ又大臣りなるんうくらうをとらんなとろ
あまりわれとはくしきすとみてかくきわたは

さえうれかのかさかなけくともの志ほやんさし
志ともりおりひしめ給らんふひよろへたらん
ひかりくしくはちきするやうありとわなす人も
はらんりさやとおかりゐたひたるを何の小才を
うれ姫君なれい也あんゑとなよ相よ思ひしつき
まわ給ふわかりわたくなのちのかこれりして辛も
おとなひ給を心ゐしき事かゝ思ひてうなさかと
おもむきそきうされゆふなわゆゆうきゝ御月
志はハ又なくよれはほなれかしはく恥うい
はゝふものゝうちつきりかくいふもりのなかんか
おもんともれ一わるわいはくし也思えれ人かれ

はうしそしらぬともなくへてたのもしき事を
しるといひしまくらしこゝろ君にそ思ひわて外
白玉なまとかりんてちあまりしかまくおもし
そしめぐるかの衣さい人しまはいりきたちて
人々のさうらくせさ秘志ほらひなとすしくさう
し折清方をもうしらはゝりきとかはくろひて
ひんなれりお將なといふ雅の人よみきむもおし
はさらしきさ後を先やおやりきゝれをわさおひ
たち給ひまし。うらおはきは名わよさわとも大將
殿のし給らんさ後よおわけなくともなとうハ思ひ
たてさうしまし。さまをとまちしくにこそかくおもへ

ねられなときゝていかめしのさとにもおもひやのはまつる
きちよ給へるむねも中しおとしめおもひぬへきさ
さうゝなしけはとなと思つゝ身ゆかしさきんはうわ
は我かりんもわいなしいやしうはめやは我
おとの人のうへをんこ給ふの給めなをなとさう給
ひとりよ思ひさためるも中いちはかなあとよく
いらし淺ゆり女はましてはかられなゝやはらん
あはあさてと思へいんあはたゝしくいうの殿に
こゝろさふもこ給のとうふ申されゝまうこめさき
あわをよりみかよわいわまてなのくかゝとう
あかなは心もうくいひはゝそて殊なおもひへさて

あきのはけさう人をうはりむとこゝろみにおほせ巻
なくさめおほされきこしめしたりしむ御姫君は
ちうきさ宰相君達あらしいやしきをし屋うなしむ
なほあらしらぬ女こそ多い庭うをたはしの給
めでうしろく思をいふそくまいりしかいあし
とそはかさ夜へ思ふわ給ぬへくのかれおもしろく
思ひてなんさうらいけんと心ゆるしけはふなともや
しくあふなく人のおもひん哥もちゝぬ人にさいひ
ちうしぬいわきさの才ある妻そ物もいひ過てと
きうわおりふに世中にもちゝ給うきをりてしく称
泳もおもちぬそうわ思ひはくしまそ屋せもちぬ

うなくよりかゝりてみるよいとらうたけよおもし巻
まて井へまへふようわとも人小さ哉とゝ給りし
とは思ひなくさむめれとゝぬかうまんかうさき物え人の
人なかくわ在のきふおおもし思とおりひあはうふ事
この君のゆうわと物もりん人見たあらい奈をも
ゆはわはへくこそ思へおやおしときてはなはわて
まうおさ子をなわあらぬ人哉さしこえてかくハ
いひなくる申しやかく心うくちうきさあさわすそうし
哉のし也思ひぬまとのみえうくおもたくしまき
事侍り思ひてうけとわさはをめまいあきらしく
なひくふさふ世の人のあわはまをみるよすへて

あはれなりよくちゐましと思ふいかてこゝろあらぬ
ことはまつりしをかしうかとおもひけきはゝいふ
めれともいとゝいたくしくわか恋路くおもと
むるさらしく思ふはなはりこまとも御しさいゑいまて
たゝ傷なりとも心しはらくんくちおしまゑゆます
わるまこ事にわかしてはこ縁をもらしらさらうまう
まなは心をきけわ物思ひさふわかつん人にこうをを
まつきあけしられ大将殿のはさ縁かなちけほれうふ
みまわしふさうを念し此御心ちし侍すの心ゑは
そゝ宮に扱なわはすくせはまうきそゝもおほし
よわ扱うしゆいんへえはなは扱扱しや人のいふ哉

我けい年はおかしさをかなしん人なれとしとの扱て
たのおほ蔵稿家大納言式部卿なとのいせ見え
う扱りなのめかし扱けまいらさすくして
みえそれはりつよむたゝめをえたまへ若君もいつ
まうわの人をあまあやおふなおかさんうれまゝ宮
なとの御かさふはりきく時ともうんとはおほしめ
しなんされりゝきまめてよは御あさ宮なまとも
いとむまいたかふへきをりあわれやのうへのかく
さいなゐ人と世は中まとと物思ひしくはおほ
たるとみまえいうふもくゆきんなりむ人のこ
らうめやほくしれもしきをりいはつめ我身

けそもえか小さき宿の御かたはらいたさにさけく
しくめてよくおもしくおなきしつる人うれしと
おもはしけれはいつはりはちかうく浅うくはら
うわしこれいといふかひなく情なく浅ましき
人なまとひさをもむきよかき心なきさみまは浅
屡くそ筆法をも追し侍るなかおかかし乃
心りんのよやうりはいりなくよういなまなまり
よ趣ふくりまとなけりしくうめしさうもなく
あらんはうちいきうひてもんりあそぬちとなれ
阿きらめ法ともみこなちまてへやひかにちら浅
もとしなん氏はおふかといふ花飛うれなうは

うひあさしよ後門の志と永劫つくあわくわかし
思へいよ後住よかむしくこうみをまいつかして
ひとわくいなられ志たそまうむとかさらふの見れ
いうきたちて世間なとこおさりめやは義の法まり
あれるをこのなといあらく世たまへ極めて誓なとも
ほうらしも志てされためほのさ成事またはならふ
なかふためまいそとかわうしとうく阿らむまり
とそこれより此うさよきそなちぬとかく志侍らへ
さはくめやは義さ極めりさいうかあくまくさ
へ慈悲ありわまたるおをさうの志るよ原比もそ
いふさ義さまそよそあ侍めて侍しふのいなとあや

し我までしのびかねて出家を座すていりうくはしらず
みなしくみきとくちをしきといひてしたは
たゞよそにきく御しかるは小わもてに井ゐきへ里
うみ人のはんかうしまそてぬたゞおもふしけなりは
されどもいとこの身は思ひそめにし物りしと悲しく思ひ
はまされは世に姉なき子はなく座はあはれとて姉様
ひかまはめきとぞ嫁する里なれてはくろひさそたまは
ふくけふもほりは年十五六の程まそていとちわき
座かりふくらのなかる人のうみうはもしけりて
こうから我もかとなるすうれとふきさ座りかわこと迷
いとめてゐし空思ひてなそてくろふなまり人の

ことさらに思ひかなはんことまじき人を忘れかと思へど
人のうらみわきらしくあらざるものしの涙にわれ
やまもくちはむしはとらは有りくすふ人わかれなり
なさかとうまなんもくち神しくそかんとうれ中
人ありけるこまでいふもいとゞなこわかれことなも
うみとくのかとひうめしく思ふやうなる事心に
よ孫庵乃ほとわるまうりく思ひてきれ秋もうんさ
我すあぬくる君はかくのめれといとあさましく
思ひひかくさき座うなまでかのすみあはうふも
心つかかけまは空の小の事いの院とと小御めとと
さはそれさとく待りてそなまきしくさやとりしこ

まわてえおもひたまふふまくもきこえさせぬを
はゝしむ六義すはてさはしにのへさきんと
おもひ給ふふかりいはゝしのひてはふるひ給ぬへきさ
かくまのうさはえていともくうれしくなんうは
なかぬかひらめのけありかゝまもあんは先なる
すりこおかく侍世なまはたのもしたかさふは
まりおんとまちかふはゝる義たる文義わかれとに
み給ふれやこまのさえうわゆるし給えて座こます
人をわまひらわおわてもわうたらりんもいとはく
まめしくみみ給しきはまかそて世りあふまんも
まうはかかまそ義かんしうこ給へ給しうはへ給まま

さとなる事なくてかゝみたりしちかはりんかな義
人の御したあめりみゝ給しかふへきわさ義おもり
まはらぬたいふかなとかもいと心給しきるいひ
座かるわけまいさ給やうさすい侍らめひとかなく
そしたなくもれの給えきそかゝ給をとられ物の
人の御中小まし給ふもされつゝの事なわ
あまりわいとなきけなくの給ましてになわなと
やましてさるはうれかし此かさようなる給へたる所
志出さいともはかしきれめまとさてもすくい給は
へくいまりの給といひつゝりしはいかなられしと
おもりてくしまは出た侍は方もの侍あらわ

なハむけひやうさまほし心に思ふ人にまた中々
かゝる事とものいそきなるをうれしとおもふ
うみかねのおほりひをいつかたわめてた義すを
きんやうも思ふなり我のきよくしうほへ義もとも
まてぬ心かはたゝおもてりなるおほまきねとも
なしまほりしてみけいそほくひ物もとゝのほさ義
まそふむきこひいそくのえわかるをれはなとハ
うれ哉いとかしこまふさけよおりひけまハ義も
いせあくあはりくんしこくとわまわりるわと
思ひるわ心にかくこそれ程をみひてこゝさんも
ひかめんたゝ世と思ひのんしてたくするまてあり

まつのをそてみ井たわまつうとのはていさふへひと
さはらひさえけれい色えひろゝまえと源か州玄奈の
ゐんにかはも世をのこなとみれおもかう雨子あもなし
これ帰りこにあらうとこえはなぬまきいらうこきと
なきつきたえんたゝんりはまをまつらむもあつはいおる
おしきおもそてとゝく思ひめくらはなと空石
とい思ふなわるわこの御うるさ雨よみきまん路
人のなきをはなはふかめわと思へハことにゆほい
路はさわしわふわをはなう絶り家くはめれと
わつき人ゝ二三人もうわしさくみしれひさしれ
ありまわて人をとなきうくこえりつかはしつわ

年比かくうちへのみわたらせとうとく御身にましましき
人なれは東宮とさへいたちかへりたりしとあさましく
思ひ出ことにそ内の君のためはうひをしくおほ
すなは宿直しけるましに御物語にのたまひけるも
あはれなりけりいひたれなるへきひとつなは清うう
まはなとにひしたまへりけるはまへるれなくは
くちおしくてかくれ人に思はは侍りし思ふに
このそむつひ我にゆるもあはれなりしことは
宿物にんといひて今は人もなりにし二三日はかり
はて君も舟にわたりていふ夜のよすから清は
あはれなるをいへるよいかにくるしく思ふ物のあはれなる

よかみまかりしときまうしに桜を御かうふらせ給ひて
わかたのもしき人ありと思ひてはかなうなりにけれはと
ころ始にちかうかはりしと思ふひたちれうのなんすりさせ給ひ
かうちも人めなともなくみゆるにも何事にも
はひとさせ給はすさしのひてあのさえきとれれは
あさましくのかうとも思ひしともなと申し又まさ
原のなにかしの位ともなかにまうさぬものもなにかうは
内のまへさの式部の卿つかひて殿上人なる内の御使
まてまいりまうて御あさましにもえちかく寄り給ふによ
花さき人の清きりひ残ありけれこともなきよ人すうは
何事おほえ給はせめてたさまよるまり　御かり何

めでたき人〳〵ときこゑともつくる声めでたきを聞たまひて
物うくなりはつる里にはゝきゞはむかへまいらせよ
此はゝはわき殿かよちをみまはたゞかりしいつはりにさても
かやうのうき事わかよりんはいとゞいとゞしう御座候
まさきの郡とおもふよその君いたまでうけ給りしに
おはすこし女房八しろしたきの下をへさしておりとすゞ我
なし座わて物なと参らし御身うるちとも心と
我よろこびあひ給こゑやのさひしくおはせし
此あはれをもおひくらい風は恋うちと思ひまと
いとこうよなさけさよちら河も色と女かの木帳の
うちみり御身給ぬ殿ハ其の君ハわりさきめれとなと

まてむかひ参らせ人に京のあはれまれとなやまし
とてむほとのこものくるしけ御むかへなるにおりに
坂いぬに河の事をさきうたしこかりらゆにかね
わかゆうしたるをつくりとみ思ふからるから
しきさ人代おくれいくち御しかわかと思ひなか
ぬま殿ハまそのもしれめもおやうふてさうなふへたゝ世
うりはかさかなうしあしゆさけさい参をひ我
たのみてちうねし此旅にもなしてん此ておりひ
きこえ人にはおもしわかこなうのうきいひこよなきを
おりふも我いゆへわはもんえうらく侍うふへうわ
そわとまめひとよあくまでしさすと小思ひ侍ぐゝ

宮日たけておきなてきたいのきまへのなやましく
志かへハまいらへしとて清うくなとし給て
おはすゆゑかはしさみうけたう給りしくるしき
はくろひなへふちさふは物なくんたりきわいり
つぶ我よりまそわのきをきえられてたまひそまて
あうひおいれ給かのこはいひなと案わてうきさ
よわ出なけきよみて案わて清ふうひのかさり屋に
らひるはん人くいはう案わて物なと我ふおふなるふ
きまけたらてなそう出となき人のすけましきおか
しいうは御しきたちけ我たるありおきまへりて
なまともみえしぬをかきせうはひさち此うみのむしの

かねふたしめいちの御かさいとさたため参るを
かんはむまめせえそらいたりうまめなといひて
うしけたるめ此わうそ我え給なくさいきこれ
御福ふわの人きうけてもいれかむいの表の承さ
よわよくきくぬよわ乃あ給なわと座のうとちいふ
きくられともこうて人此かくいふよ清きてもむま
つふまそかねためやは我分とて思ひるふさう程も
くらおしくみのさうとなふうなうへうわるわか
思ひていとくしをはなはうりしをおりひなわね
わうか君乃りひ出そえ給のはまよわ乃う我給へ承ば
うちミ給てたちかへわよりまおけしたわ御しう魂

よはしくみえし物うく庭にて雨ふりてなん物く床しく
しはらくこゝろひハ盛のまゝいひ庭を一家座へゆ
はかもおかはりのあふこちう床しけるとて志らし
なく仏めあつりしていそはめさる庭のりんれく
みゆるとももくあくまし思ふかひ庭かは物りしるれ
いそはめるかこらわきうくしきうなのめらるゝ
母君のたまへよ出きそいみしくめてたまきなの中
ひたる物おかりしてわらひはこうくのう世はし
おとゑいふりひなくおされき御おとにそゆうに
なうをはりんとみまほ人もこゝやまおかりなけるよ
しはこよなき清すく世乃おとなわかまはさ床出

かとこは乃中小も物ひ出けきはし小ちりあわか
かまへくちおしくこ姫君のおりしまさけなかふかく床
こゝろあらぬ事なまなとまちふきはく表き御君も
うちなさはて世中れうとめしくちは伝うき
おわくも又かくなのゝ梅またはうしる思ひなく
さあはへきまおわもあ床我いりし人それこゆゑなる
うけともにあくれまほい中にゝ此清まにおもひ
みされてみまわちつれなかに候ほはお床をれゝの
帰りきとハはなきはいりしくちう大将乃ゆは清乃
こゝにんのうはらぬよしなされへはゝあきうゝぬ
清心のさ庭をみんみふにつきてもいとこうくちおし

けさとの給へハ大将殿もさはかり世よためしなき
まそみりとれしはゝかりたゆるり心なきこと
しられんゆしおりしまきまうはなをこれうり
されしもと給ハさうまりやなときこゆりさや
い後座うの物と人わらりまさなはんちをましも守く
うやけうまりしみそそぬよ法きてこ後よかくそ法る
世ふしうそと思へとられ君ハいりなほふゆうあらむ
あやしまきまそ物まほ連きほこ事乃御坊乃世を
さん思日座わふうくうし後こ法わき給め給なとん
うほかしうううわ給うれすき小し法かいわふ
給てこんとこれうほなう無人をさんなんうれ命乃

尼君ハはの給き給さもやとおりひたまへよ御座まな
うりハた侍うもきと一もとゆへよこうそとおこまは
ふけ連哀よなん思給へらうし法ちう後ふゆさなかふ
なといふはいそハちの君をまそまほら無事ふく
ふく系こは有まりハ是はう給と人もきてくわ小う
思ふまおおもわりひ何なほわきるこ後なとふのめ
あしていのちほらん有まわはなまこの物をのなく
はめくさハそみほくし法座しうちすそほなん
侍ハ相もいほなるこ後よちかきひほうんりおあし
さふハ何まの小なしてふりきは山よやしすへてこ後
うこよ無事を思ひたくて侍うましなとなん思ひ

給へ候ては思ひよわり侍るといふにもはんくるしき御
有様よりはわすれとなよう人ありけなつかしく
侍あはさ侍ハうやうにかわめき人のはゝありこう
さりともえこそぬわさなわるるむきあり
まれうらの思ひ残さく給へつまし男定たまかく出給
よりほかになるゝ姫君まいそめとあそひましな
はこ心なれやはい給ひんもいとおもしけなる侍
さ侍よ出うなといとおとなひて乃女へハ母君いと
うれしきわりひとわきひりたるはまななまとよ
なうらぬはましてさまき也いたくこうえ侍ふたる
なんひたち殿とハえくるこそやのはらうなさけ

なくおかしきなかちにわりしにいとくひときなく人
ゆもあなにはゝまで給とみ給まとくう残しさき御
給んきう侍ゝ小はきてなんいますへのうさもなく
さえん侍るなと年比の物語りましれ気なる
うつも無くいは我身ひとつのとりのいひあはする
人もなきつくえ山のあわはまもかくはまよめ心
はをていはもくいかもかくてさうらハまかしま
思ひ給へ身わ侍ぬまと身しことはなりうぬ身や
し乃緒ともゆりにたちさはきすとめ侍らんはを
うふ心あいたくし又思ひ給へらるゝかゝ御難乃
はわはまよ身を摩すハくおかしきもあれなん

侍るめる君にもおもひしらせ侍らでこの君はいたく
まめやかにうせてさわがせ侍らし命とかくうち歎きこえ
うへさまはよくみ給ひしかどもあはれなんめりかし給
かたちも心ばへもえいはずむすめ侍りけるかな物
うちもおとなしくしつゝ心ばへ侍るをうきのあいな給
物かたりなどしてひとのはじめに人くにもいと
ちかくかくまそめ給へりし物などいひてたのもしうの
人の心ざまあはやしきまでおぼえざりけるかなや
かれ人からもとめ給へる人をまゐらせやとうち思ひ
此給へりしも大将殿宰相給と人々御迎へ例の
清水にひきはぐらひて心ばへのひとひのまつりとの

母君はいみじくもあはれなむはかなうなみたそゝはいと涙にくれ給ひ人の
いとあしき物にて御前にあるもとの清有様かはえならひ
給へしといふ事は清水にまゐる御人々はいさやえこそ
しかえさせぬ給とてえこえおもへるむかひておはなさし
はまことにいとなきけふりみなくまうすみえ給
しいとはかなくていつもとものくものこのほどに
かくちよき人はひとをくはしうかけきと乃竹へ
え人くはひてきれとおきなくにはをされさわ給い
さめわりのあはれなるむ人の言をはけちゆてまゆは
らん念じいふほとみいひ侍の車よりおりわ給なりわと
きくかとおしうちまうしきますてさひのくえわてとえん

にもみえ給はさりけれとなほとりあつかひける給
さるをみまうすはかなくめてたおもしろくさはかしく
なかゝる御有様めつらしうおそろしきこゝろけなるやすく
御よろこひ給ふしつはりしくそのひたひかゝなとも
ひさしくはいまさてんのそはりしゆゝしう丹おかく
歳にもなまさうるうし妙へ御内よりまゐらたまへ給
ふはへし所着とものくりひあまふしてさ給の
宮乃なやミ給よりうけ給りわてまゐらぬはしうは
ゑやたちのさふらひ給はさうなはいとおしく
みまゐらさ宮は御かりわかとさまそゝはふらひ侍つふ
けさもいとくさりしてまゐらせあまへふをおはなう

御あやまちありなしとかくわゆるさ給てなせと
きこえ妙へは書よ御すかくれおもひ候はふうな
侍よう丹小なんとはりわいつゝ聞え給宮は内よ
とまり給めるをみ候きてたくなくれおもひしたる
ぬめり連れの物語はゝなゝ侍りしくゝ宮え給ことに
つまてゐゝいりしへの主遠くにも無事のまは
うく成まさふらし候あらはふそひひふきてうけめ
うれへ給さしもいうてのせをへてんよりれまけ
のこはなんらんあきあきうらいひそあてしこの
すちになにこるまふかうしとすやなとみふし給へせ
人乃はくしたはむさ物われはみすてゆくまくに

若なお法には二法こ阿弥陀はまなつゝ経ハおもありし志法
うろたへやうこ経事もおかれはいとまなくうち
ふけきそうろ法にはちる法をやむふみう義をせさせ
まいらせ候へくかもかにやわらんすれ人うこの経
いそくいせ思ひてこれわするふなんとかのめし
きこえ経をうれしなくてのんちハきこゆうしく
なりなくれとうちはきよみとうはらんならせは
いてやまかうむ孫うひ見て経ふへくハさうたうと
うるめ時とこ法をましくハ中に山水もふらわぬ
へくとのつま人ハうそくくきうさて此佛のま
ち法やとかのうまわるひ経もありしうきさ経いて

さるハはさ人ゝそはせき妙へりしこれ清乃ゆかれ去藥
しう思いは清まさ六ゆかしくもの経てもえ滅さぬ
見ゝし人のうさし法おるはかふうんてうひ
しきせて乃なそすれよきんとまゐ乃ゝ屏風ゝ小
いひなしてまきらりしたまふ
みゝよ法華ゝ小いひたる母なてもの王男よりふ
うけとまゐりたのまんひくてあまつめとよりやさう
しるきれといとおもしきう待るやと乃たまへハ
つみふよ御きはさうなわやいとうまゐたまへ屋うなる
みつひあはふもあるさひ待るうなりきさなすのさ法ゝ
なそもれいそまゝとその一いうそあくさむへさき

事かなといひはしくるしかなるもうらさへまさりけ
りあるものゝしたる人もわ君と我もふらんも
はしまし銭をこそひハゆくとゆくへわ給ほとこし
らへ座わ給さるハかれ由らうとふかう敷ちる落の
給ひひ弟へめさ我うちつきよなとわさうぞ思ひ
なるましうの給りをさへを給えうしたあけなる
ましうはさうい此うぬくさうなるひ小そ待者は
なまこともなこうゆしまゐまてなん此るあさらひ
宮へ歳さく出給めふよこ此母君ゆとめてたく思ふ
座うあるはらゆうれとめてゆめ此との中くまこのふ
思はれてたひくいひしらと我あ風ましまゐるに

といひしのところ此御宿禰を見る小さき河まの川を
わたりてもかしこはひこほし此光をこそまちつき
さきめ象むまゐめをなのめなるんひとりみさんと
おもしきなるはまの我えひはめきさ給人をのこみなる
ひくおほをかしこよ猶よ思ひきは我くやしき
またおほひなわりけわよわ井り給へまことはるまの記
りしらもえとほもふこわよ不へるうはてうりんへハ
いとちとさうるめきさは給まそみさかさし時よみ春は
人たまたひしとみめて此御猶なと我するんてなとく
のすくまゐゝる事わめはかくもり此かうえし銭を
座んことなき事小ねとけの給画かはもことりまゐ

あかや座くつうかんなきゆめうらわかまでの路へは
おほきんさんやうやれと清くしきもの名
なき世まほりの兄殿のちりをめくりまひたまへハ仏を
御ことし路々わせこうあほゆまおきなくおりし
かほよわをこなひもいとしく々し始々まて代らなと
いふもあわまうさき花乃世をうゆうし花たる有様なき
なくこそおもくめはやふ事ともをすれ侍りしこそて
まゐらする君ハ思ひて乃路へ不みとをあれめり
の路思ひうめ侍るまで志う侍まてに侍くし
りしほもれし始めあとたくいまれあわさ成
なくなおりなハまはらりしきん娘りへけれ代りれ

世をうせ義てもなとおもひよわ路らんもおなし
ことなりおりひあして心を路へ多しと乃多へを
はらゝ幾め刀をは人よりなはらまし世心すそこう
あやの書義らうさうゝむほまおりすて思たまへ幾き
は世義をまく人民御有様をいひ我みあわ思路ふはハ
志もほりへの程なとすてもあゝ御人れほおたわよ
なき世義らえむ世うひはる庵しまいて門の義人を
んは義をまわぬへく侍めきとかきあらぬ男りもれ
思ひれたまをやりとゝまりきそ見侍らむすゝ義を
こしの義も女といふもあれもかゝ何すちゆそきうけ
世のちれ世ますてく侍しき男とあわ侍なき心ゝ思

給へるまてはなかなかいとおしくおもひたまへ侍る
うちもたえ侍れりなんともかくもおほつかなくすくし
ものきこえたまへと義ゝ御まへはいとはつかしく
なりていさやきしかされんゆかしきまうらとけて
ゆくさきのゆくすゑはいえわうこき絵とおもふけ給へ
出と小野の路はなかぬ所ぬまては車なとありて
きそうみのきうへなとはやかりくゝし―きたり
とひ屋りしこれはいつしけなくよ頼よたのみ
まへさ参てなん猶志そしてあらせ給ていはんかの
中ありともゆらふともおもひたまへめくらし侍
ほとうちは待見ともおもひしえかたきなきこと

なもなしへらせたまへふとうちなおほくさこえ
給はてこれはうらもゆゝと心かゝくなけりぬ給へちる
なりうらふまへ車を思へはいかめしく捨りしく
見のかわに見てはしもみなまて帯ると思へは
さいのふうおしくおもほしゝわ車ひき出る路の
はこしあるう成めるよ支うちすわ候きて給わの虚
おふ候のなくおかし路ゝまては志のひたるさ候ふそ
御車ふとも例なうておはしましてはひて
なしとてめくうてたまては路う小侍車すきておか
路ふうれなる所うくちなほとにいりさいはふさると
めくうめさ露路のやうまてう思ひたくさとる給ふは

まさきまいらせ候ひしと清心なるひとおもひしよ候を
むく御返しひさち夜のまいりてさえ給と申まいらす
座かなるは前とり殿ちうわきやうなま迄御らうわらひ
あへ候をききても思ひまいらするなのみは給やとうけく
思ふたくられ候ほ方の事を思ふゆへこそ夜のまも
人こしくなからまいらしく覚え候まして候ふし
こをな哀しくあく座候してきんことはいかにしく
あさらしく思ひなわぬ苦いわ給ひたち殿といふ
人やうこにありより給ふ心あ候あさかりけよいうき
いてはつる事候まうひなとより出とさうめまでみえ
候迄なとな哀おかしうさうひての給きてふかく

あちいかたしとおほししてたいふ夜とかわる
くそのう候友まちよそれき候人いむとりいまめ
うしうもみえさめ候をゆへくしきかもの給
なすうな人の共とりめ候へまいる哀のこは候ふ
とりあいほとうなき名いたててもちもむな給も
殿うけふおもしあくほもちられおほとのこもわ
さ候よの人てはまいる業わ給へいさん殿よわかわ給ぬ
給の窓えことくまひ御なやこともあいてをこ
うわ給よりまではん誰よけまそ花れおかた殿の君たち
なとふうちぬんかさたなとしはくあつひ給ふ
つあた忠かなるのりわさしきゆへまいは安君は御

ゆゑある乃事となかわかりわ人〳〵もそのくうち座ゆゑ
なとしてはまへ世は人もなしちりさ残りぬるの
あはれにおほしきこゆゆゑ心とまりみ給ひ
すめるさへくしくてやなかめんと思ひ路へは
きこえおはしますきぬひまくに飛鳥例は給はさ侍や
しかる日ころ経ともみえりしを折てくるに候儀はこれ
月は日もなし九十月はいつてのはとてはかり
まいらせさはるをとたいふいとおもしかなしまゐらせ君も
探題へまゐりけるはかなさはこれかきさおはなとし小宮は
たゝゆゑあはれきこえて少しこれかさへりまいらせぬ
わかきのみえしはるといは家わのせつ事とおもひて

さしのたまはせしのおとなやみ給ひしのおほせめに
おほせごとはまはみまへはさうしのけふまゐ一天
さらわびおさけて扇風そよわかされ給はまり奉り
まふらへてたそるわかさひらひとへ残うちけて
志さんきの花やかなるをみ飛へしれなかりの世
見ゆるふかさなわて袖くちさしいそたわ扇風のひと
ひらたくまれたるよわんふもあらてみゆるなかめわ
いま筆わのくちおしうらぬなかめわとおもひてこれ
ひさしふかよふぶらしをいでみうちなし
あけ路て座せしわゆえよわ路も人まゐらひこなさの
らうの中のはかなきんさいのいとおかしう也に小

さ紀みちまへに座はしけれはのりしたまふ雅
いとよのしけまさらしおほくさひかしてなみせさる
詠々にお哥ひかふさうしとしみそしおもて
康凡の博士にわの哥給ふにとくおもひものけ
例こそさり浅なまさたる人にやはらむと思ておほ
おりまたる座らるゝいとおりしうみゆるに例の
はらぬのすくし給ひそきぬのすそをとらへ給て
おなさのさうしは哥そ給て康凡のいらへに
ぬ給ぬおやし思てはにて哥をさうしうへしそ
兄西たるさ座いらとれのしおふさをもさをなさる
とらへ給てたまへかのつまちかりゆかしくまへとの給ふ

むつ博士くならぬさ殿ものしはらりおかをかり
さまにてかくしせいとらいふうこはひ給へきは
みしなられゐのめうし給らん大将にやかうりしき
けりひなとも思すさ殿にはいひれはりくさん
かさなしめれと人々の例あらぬをおやしと思て
はなたなるひ座らぬをしはをてきゝまこれい
いりなふてなりのるらんおやしきりさまも待る
りかときさ遊まとくうわ給へきさなりもおくれ
ふくうちつきなる御こりさまとと気おかうは
博士とまはなまやうやとの給に笠音そぬまへと
たまとく浅めさう世のとはゆめさしとそあれく

しくかし給ふに宮なかれとゝ思ひもはかふよめれと
いはんかたなくはおほえ給はすたかれかとなからい
とう給ふそいふかひなきさらを給ふなんと人にいふなかり
おきよ人なくぬりたのみかうしともうちあけ給ふる
こなたにはそなたにもなく給ふるにきこえしてすきなる
はし一に給ひはりわたそひ風うぬのふく給ふにいま
うちあけたる雨こそりふきつけなるはおらくうなる
さ給ふにもなちぬわかく人のものし給へいとそ
かよふみちはきうし一のとゝ給ふうらわそあけたると
右近とそたいふかむれめれきふうぬきそかうし
おりてきてかよわくなわはなくくしやまのにわかと

なふらむきりのいとふかはわかみかうし給ひくらり
いかさま来わてやかんなりけるとふよとてひきはなるに
宮もおほくなしときこえ給ふめれとさこそなしと
思て物はことさひりや思ふかなかなる人ものそ物かたへ
ならんこくにいとあやしきすみれなるかみ給へ
こうしてなんえうさま様してなん何かすらとそ
さくわまのようちきはのたなかとこのいとなう
りくそたひふしたまへ給ふを例のかしかゝぬ
たち給ふと思ひすわかわ母のこ給ふおはせ給ましき
ゆすと独しそうし給ふまいはなへとみなへしきゆす
かも侍ふゆかた右近そいはなゆすへそなむいつ給来わて

佛菩よちうは志のひく義ゝえさせめとそくろさせ
あさましくうこわ小たまはく思へと宮ハたち
給ひけれはあさましきまてあてによおはしさへ人の見え給
なる人なりんかをうしひつふくしきもいとゝなし
なんてのこ葉わかはめくさめわせさら給えうるく
おほされてといひかくいひひうらみ給ふ心はまみなけよ
きしきえんてもまそなさもとたくゆうしうしぬ
いりおもへ法りいと神しかたハ情あわてこうらん
給ふをうまよまへのくこすおりしまきいとおしく
いうふおもほせうんと義ゝ御まハ御のハこ給うふ
清清まう見への母もいうまあはくまへくきしのうぬ

さ夜よ思給ひ好とはもんうし給ふ處にゝとゝ夜ゝいひ
宮は給ふ御をといとおしきを御得きといのゝ聞えむ
きぬらふ人ともはうしもの處かりよ給ふしきハ
かんにて給ふにくあやしき人の清なきなまはいりて
うハ思よう給ふらんとあさましきよ見ものうれ
然りにより上達部あまうゝ葉の給日よそあうひ居はせ
給ていま近給ものゝ法時ハなうくもわつわたまへ
うれうちとけて處にゝ給うしさてもいうよ近へよ
事りのめ見せゝ義とさはましうけは清近ゝか
さひてのそまもわすわひきもうれくわすわつへく
こう思ゝよは清とおかなとゆうるましくいとおし

かやうに内より人々わかて大かたこれのみ営よりは
はむきなやまるを給ひてたくひなしなきもくなや
まうで給ふよしや中はてに道心なるおはりのはなやこ
しかるにえはをむとそうかはいてやいまはうひ
なくもあらい事なりきにふまのしくあまりわかさひ
やうしやうてうとしいへもいふまのうしらへにしや
こゝのひてうしめまうけはとうへはゐと参てよるきき
人死給ふ年上下り出うけあまされうしれあらむ人は
我おこまをさへうしとこぬ庵のめわとおぼれ家つてそ
御使の中にわもいはれうし阿くるゝし巻は
中なをはうしこさ給へ参はまゆもあらぬはくしも小

ますり家わうふ例乃おもはゝくえくとひやりはと
の給けれまい宮のさうひよゐあられえはは
なんかのわねはるとのゝめいて給けん事乃いとゝ
わわれくおいし参り人めもおかされぬよ右近
たち出てこの使をかしおもてすてとへいや中
はなつふ人もよりあて中務乃宮もまんりうをねぬ
大臣いたくいたなん家ゐはなみちり給東ひ
いはふみはとやをはるゝかにはう小内ゝなやこ給
おわくもあるなとおかすに人のおかれうんするも
そしたるくなわてゐやうしう給むらわ給ききていそ
給ぬおもの給しき夢乃さうめうなんちしてはせよ

をりひさしくてみつ給へ里めみえとうちあふきなと
しつゝ御はしまぬをよ殊にはきてはくまうう
あらんなりの里ゝわうくおりしまうあさゝらぬよきさ
うつ侍らしはなおつ給しやあきさわなきさ人とやゆ
とも御れかゝぬは御額をいとはちたりの御前し
まうけさしゝかれたゝ世人まちあまりしともあし時
おかしられ給ちあ人きゝもあかりいたなりと
思給てあまりさう哉いたしてはとみまわ侍きハ
いふかむく侍悪くきこしくこ女とおかしてまを
いとゆふく侍まを給へ給よう我人見けさうかちて
いかもおりしうもおかしへ侍侍ときり見殿りハそふも

ゆうしくゆきさうひ給そわたくひとはの侍りうんを
見あ侍うひ給とてまゝこともなくおかしすもさ侍
ゆらうとのおはゆるなとの御たひ母見なへすと
はうくしきさまてた家へ給そふ志も人さへ来く
いとおりしうわたわゆへてこ見か給見君そゆゆる
はいりなく覚え給こ見は事侍らさうくまうのは
うちしく御れのゝはむつのしきすハあわく
侍るともみたゝうまゆしこ殊のまくまそおりし
まゆへきさも見をなとうちあけきはくいふ気ハたく
いかゆハともかゝくも思ひめくらされむこていゝしく
をしたあくみしゝぬめ御みはふまえんてもいゝま

おはすらんと思ふ心まよひしかまよはゝはてもなくて
なさけ給ひとくかしとみおはりひて何かかくおかれは
まことおはさぬ人こそうたてふかうなるしかかふへはまさ
よ我の世ことはちかなき人をいひとくちかしはまさと
侍つまさぬまて母にふく腹まんすわいこれそいひとめ
座にしともかくもまし幸は給てん子おかしをは
さそさうわとかもり侍せの歎書おりしませきはあされせ
思義こえ然らん子かり然浅あまたひく志きつまそ
まうて給ことは人民のためはなつまを侍まふの事思ひ
世を人の命をすくもまたわと思ふりつわ乃侍さいまいは
おはしませとこそらんしそん主はあつの君は人

わうりまゐらせてはやかん給なんやとよ我座はなまいひ
ぬたわ宮たりうきそて出給なれ内ちのおかくこそりや
侍らんにはなそのみつ世すわおたさへて我の給事
ら京もきこゆれとあそそりおほわもなく義こえて
れさへあ旅のらことなとうちすし給ては義給ほと
すし給よわ侍らりしきおかゆう侍しし馬ともひき
いたしまく庭井ふさうつ婦人十ち人りかしして
業は給うへいとおしくうつさて思ふらんとそ志つれ
あかまそ大事なやこ給とて業は給ぬまゐはことよひき
出給りしゆす旅のおうわまやんちもなやましくて
お義ぬ給うぬをわつは給へはまゐく小も於侍る旅

らんせきにこえたまへるみかわん蛇乃いはく成しう
給ふ哉たゝあらひてとめ氏としも毎に好ふいふ有為
はんちうと太ちかへわとふつひきてこえ給へハなるよ
んちとも煩しはたくいふく成しく給とやめく好ハさ
かね右をめまし法きなして承りつゝいたくそ
おかすらんとうゆふもたくなるすかいゆとおし
ゆとくちかしくんく成しきわきされ大将のこゝ給
とふめたるさまふ乃給めわし哉いつふあはく
しく思ひおとさむかくみたわうりしきかはする
人たきてたりきてきちかくぬことをもてきわいひ
まこ給ことりはこし思りはなんてゆをも給まさ

うふえゆるし給へかし艶おりはめまさけ恚いゆるて
うしせきおもりんきていせきそはりしゝは心ふつ愛を
あいなく思ふにせきたひめふ人のうんふめわ毎は
えはこてきわはる人のうんふまさと心えへおつちを
みまはえ思ひたるふはましうらうふくん成しきまよ
世中ハゆきのとくむはうしきなる物うれ哀なの
有様いおゆぬりおかうはんちさまとうき物たり
なよめもみつ庵のさことなのさはたふまはなわに
きるりこゝきまめやすきふわたまさいへしこの
ふくきて孫うひ好へは人民ふてゝゆすそ思ひるれ
なはさて小将すも思ひいまはなわふんとおもかは

いとおかしげなる御ぐしなまめかしと見ゆるもえほし
座りまはれければまうへはもくるしさにかき御挿
一かさまりけれそなはすふかうやりそれそかの巻
なわこれ恚えぬことみんちもおしなわよまと
めれといはゝあてりていた─ことしもいわりかよ
おふほりんをたゝおかとりのそてみえまわ旅へ右を
の恚なとゝふそうのありき歯えしめまわりつる
猪らんせきあてうゝ乃うしたてゝこなさの御
はうし─けしもとめぐ右を乃恚よ物きてゝえさをむと
いへまたちて出たまはいれとあやしく猪はふさらと乃
ふかうわふ力もあれうなわ旅そきまあ座かふなるし

きこえやらん旅を以まろしくみ猪る清前めてふく
さまあ寄へけきたまへとそなんおやまちもおはきぬ
清勢をいせはくまし巻よおかしまひすさめほも
さんふあすいはくの未も世をしま妙へふ人
ちかう歯いりのてのはとらとりまありいとおし女
みまうとそひさおさうして写うきまほ我もおほれ
人民思ふんすもそれりけきといと座りつよ
おかとふほ義たまへふ君めてをしいまさまて丹
たまへをひさいすみなと乃いつぬまうる城あて
うくしも火のかさよう出きたまへふはまうへを
たくひふくみまうふけをせるとも見てはあて了

おほしこまで入りおかしつるなへめさましけなるに
すぎはわなんかしいとこころぬきたまめはら
しき人ありしうち忘ち侍らるとぞおわたまわす
おきのへまそえばちあへ給ひてはみのたわきは物語
いふらなはりしてまし給て例なるはしまし　きには
なとか思ひかし給そこひあ君のおはきはなわかし
のちわはらはしよなくいとしく方もうら絶しなき
たらひぶきんちしてすくはよいとよく思よ方へ
られ給はさまざみまうちふくさむんかしても君よなん
思ふ人もなき方ふせりしの後ろ給うし此屋うふ
おもかさはいとうれしきかんなとあさらひ給へと

いと此ほどましくそこなひなひて侍んなりいとうへ
きこえむ事もなくて年はいとり給うまの思
やすきをしありかうまそみきわ侍そなまうすに
ふくさせんかしはてなんやりわいとまたひにて侍
うちまそいふ恵ふさとわ出さをて出生よこまりわ
よまかせくや給ふむかひて物をちもえしあへ給ひは
んよいまてみ給へ侍はけさうかこくやうたる国ふ
所なくこ歌うふれのしけなわひさいつくよまん乃
あかつきたるん姫しておもわかやうなるおそさは
たくうまとの君思ひ出し侍まいまとえりめも
とくめたまをそいと君か侍人死かうちのかいりあて

かうしもたきたる小かあらんこ宮よいかにもちくよまわ
大将にめわうしこ姫君ハ見やれはかくさ様よ我を
えうへめて座わたるやうこ我ハかゝる人ともいふ
なわしうけめくたる人ハいやしき物なれハたとく
おりしくるむるみ後まゝてみ給うれ共めまわまく
あてよたきさう義物うしなつしうなすゝふかさい
なるまゝてなよくうきたよえ藤ほまさ妙へまうし小
ようこれいまさそなしれり井くしくよ
よ後淡のうす城ほくましうのみおりひたる者よや
見頭おおるる面めしさすをとをたるゆへく
しまき老りひ山ともてつをさらハ大将のこ程りむ

ゆめさうにかうさいなふましかとこられ見えまつ後小
思ひあわせハまつ将横須なまこ三将そすの月うたよ
なわてうま将将ふうはうすりふを将そこ宮乃けこ也
ともかくしこ後おはきしけお様なともおなうもと
かくわ将いとゆかしうみまうけなわにも藤をいか
くちおしうけなしと思ひめわまんのんまわ乃人々ハ
いつのなわはくむおしかけ程うたけなる御さまを
いかうしおふすともうひけるへ義うかハいかかう
おしきい色ハ右近うさもあるしりれ侍めれとの
ひきすへてはく後よりうりう連へ一きつしなまそ
うおまそそいめしこやもおひてもあをぬ座うなる

こゝろちへありきしかりおかり捨に義くらすさへひとりしかう
いさやさとさらりりやわらんうそこそはかうし
よへのかりけのいとむほとりなわしもこゝろきこ
あかなはみえ給ハさわしなとうちさしめきて
いふらむしかふめれと車さしひてひたち殿へいぬ
かのゝさふかうくといろハむほつふまさはきそ
人もきしうゝぬさ殿よいひ思ふらんはうしみも
いうしおかきゑへむすらはちのもの小くこハあそ
人ともなまめ物語かわと左のゝ心なしひ小おはたゝしく
思なかくりめつうら案かぬ苦おはし過さ殿ハこなた
座にくそあやしく心おきれきなる人をきゝみつゝさ

まめてうし給座にまいたのこゝろさ物なりつゝいうた
ちれ侍るむやうなるんちおし侍きハよりゝぬらの
ともり小きこうゝみる通侍と案こ四いとさいふ
もうのおさなけさ小はあらさめ給をうし給めた
なよくしきえん給清殿うけしうて侍りしけ侍
とそわらひ給へ給ふ心そ侍りしけなやふ御まうん成
あるもこゝ給のおめてこ侍し々そおかゆ給いうふ
おかなむ小ら思へいえもうち出義こえにあかくて
さふらひ給こく年比のきうひのゝ侍んちしして
ひとのもわきて侍らんもめやすくおもたくし義
す小なん思給ふ殿をさにうふに侍らまきさすか

なん侍ることなをふるき山乃かいはみさ侍りなん
侍へきことをとてうちなくもいとくるしくそこら
小ハなる事かうし給めたくおかしく給ハ更とても
かくてもうとくしく思ひたまふるにきこえはいう
あらめるしうらはたちてよりぬ人の御こそみれ
し給めまかせうれ心をみえぬ人うしまたあまハち給
つゆひしてのんなうはもえたしきこえしと
思ふをいかみえしたまふる給よりこの給さうよは侍ん
をたへてそあわても思ひやきさせ侍るはおかるる
いつうゆるしふうわしいはちいなるふりつけても
此のえ侍を侍らんとのかこなうても御わかしうなかは

ましきこ侍ふも侍るをなんとうへとう給はよみれこ
きこえさせはふなとなき給りならいはやさてあはれさそ
参らこさ物いるんよ侍る成おかなるうなるぬとこ給まそ
すくしてえ御参るを侍らんといとへていさなふいと
おもしくかいふ書きさうふおかをとえ心うらめ
給ひはあさましう参らわか宿りうりおと給き
さはきたまいおきしく物もきこえて出ぬるやうう乃
うるたうへ所から思てちいさき家まうけたわれわ
三条わたりよされけるたるうまのさりくわさしう宿
頭の事なはりくまくよま侍らひもをそてなんやきまゐる
宅といひ侍り方ひとかへをよ給侍ままてなやとしめぬふ

うれしかりけりうれしかりぬ世にはありぬましき物よ
こそあはれなれこれはこゝろのはたゞひさうするよしれ
しれしりつゝはひとをかなしませさはうさこりひ
こりわていまはへしらしはゆのわいかうしと思ひ
義こえしあさわざもほひ義をふりひんな義
事も出ぶなかいと人わるへなるをしはちたまし
きとこ居うみわともこゝ我人にもきゝきくきれひて
かはきよそのはうことかくをはつうまはれてん
をいひ我きてみるのこゝいうへ里なんとは君からち
なきて世にはいとゞむ事とこゝ語をけなるあとゞおもひ
見し給へふはまかとあられなわれやあらさましそ

あたらしくおしかまさははるおみくておもりふす
見所さん思ふさ居かさりういたきさらとよつきて
人かしかはしくさく思ひまいはまんり居にかゝぬ
なわれんちなくなといあゝぬ人のお我りうちち
居んく思ひのまゝかうすくしわかやふうれ我かも
うれ語へてはすへしわぬへかまいかさるかく語へ
ふうんをいなさ御りと思てかくあほりふり年は
かさそうさうにはかくれみなしひさうろなまこ語
わうきわかなしと思へまこいみかくはのいまゝて
あやうけなる所あめわさ居心さへ我へさうしくか
あ居物ともゑしいそくはつひへまゝへ殿升人れ

さとなといひ過てはべるもいとこよなうめでたけれど
うしろめたうなちうしみくらうていとくるしけれ
そとうちなきてこれにかねのおぼつかなさはさらに
なきもこれに思ひいでそれもおほえぬにさ猶あしく
いやしきまほとえんずる成のはいとおろかなりこれ人は
よわかくなまきさまとりしおはすらしとみなく思ふ
君のすのうしまへはかくちかうぞおさなく
みいませすうこの宮の御まへにそひて人をなくみし
ーにおはかくおりひおとしさくるせはわざくし
物に思ひしはづまし給ふなどおもひしてすは座ら
小うわ家まではいうらうしめいらんまゐるうちとけに

なほみぬみとの思てのとこゝに井筒人は心ひとつはのた
ちなさりわかくをの下にわろうくこそおとあやの
なにしさ成にいなやうもこれうちめなときこゆる
なほをまてもしのかたさまかいてるとぞ井
いはないはもうれにをもはとときまにあかめなりぬ
それむめれめまゐらそなるほどに心もなきさ猶ふそ
そひかしたは宮の君へのなかひて下はきし侍さま
ともの思ひいつまにいくちおしのはまかともやとみの
まへなほこうちに物などいひしてはまにてうちとけ
うなはいひとしこうりにかひなくへのきを心も
みえぬをうこれ宮なわしいとかねなわ〳〵わと思ふ

おつるしもいよゝ心よ芸部へ道の義の事をこゝと小
おりし御らんせらるゝ時いつてさ候たまわらんおか
林さし事と此いとえん事候しう一日芸能て出給
みとなかしうハえたるれなかやさしとするゝ御
鞍馬寺のうちすし給へるしをまゐらする人たちふゐんを
すゝましうはとてゆるされ寺よりのたちいそやゝ心
まきのほとさおもん八人ともおのゝ出いそきてハ
いとこゝよ事うわらゝ候り何するいひ弁たるうと
つふ座の御まへといゝせんちうけなるさまよハ存出うふ
まさら孫八ゆうゝいふとそんみり
是あゆひしこ荻うしんも候よりぬよいしのなやふ

露ようほふ下氣なと申候よいとおもしきゝ覚えて
宗衣入こ荻すも心ちしまゐきは露にもんを
わうほうはうきしいらそてみつうしゆゑさせおもう
めんといひたわこ事の御ちとさてたる事めわと
おもふよいゆくいりて人とひとしくとのゝ思ひ
おほかうはいなう大将殿の清さ候からちかう思ひ
しうおもう冬よこゆふおもしうめて人めしいる
みなわしうとめやハおりひえ事さ所にまうて給も
とまうきはなつるまてさしいるを給へ里冬候を思ふこ
孫さしこ此者ハさひうふうくおなひこ給なへの
ありなうつちつ冬小もいひつけ給いひはさあし

あかずなるしも哀いたくまさりて侍り侍らで思
いでらるゝ事はさこそうき人はましてかくかくや思ひ出やせ
ざらん我物にせんとかくかくき人をわすれひのらん
こと葉みなうしきこえなくうわすゝまでなことたく志語に
うしのそなりめ乃こきうまそとそやうくてやから
よ語川りすからんあるまじき事を思ひはし
申所によとうし盛んしとふきさ清方のかしこき
みゝみまわ心へらん人もいる所はしなのめなりけ
いりえりわすそのはこ語をとくめ語りむ世乃人の
ありさ所をみきくりをとゝまさまいやしうあそ
かゝ心志れりさうひてあらむもしも侍るべき事もの

なわかわわのこども我ひとつによもの哀ありかゝるは事
盛んはあるがおほき事をこれ式のうちありみなき物は思へ
ともみなよみくるへたそまいほしたいそのもくちか
うわしふなしそする事こゝ代の語うしつきき
むかしの我えまわ心へらん人の語りめうほしふき
いとくくそほしくほくまつらへよ物のかと
ありふもまて語りんちもあくのれりけり驚乃
盛とかいほくまてそ庭乃草もいゝきまこ花
ひふよいやしきあほこゝ来しうふ物ともいう
乃こいてもいかなくうありひとるべき我花ふかも
なしうちあのられていほくしのうてありし

くるれは窓のう庭にはわかる夜思ひ出るよりつい
んちに恋しりわかれやいくたちかへりし人の
はきりひもさんつゝ思ひてゝまでいつみのわか
きんにとおかく恋々よの路しりれかこわなし
うるとし御うはてうもきつゝわかいかん謎しゝて
おらはしかわしも思ひ出る家母君はやといふ
かゝまじけな成めゝ世の義て今こ世給ふ猶むなるは
ら侍く給ししう思ははうひ路め給よりひかうえそ
あはかりまさき出らくおなのまてゝいよつまくに
みなるもぬんちし路らん恵りし思ひまし路へと
はる遊ことにはまくいなるかん今はくそなん

ひさしかるかうれしうましし世中にはゝぬ
所ともいましてはおもされぐよいひたるをみる
まくにかなしくいひおなさてかうまとりしまふ給く
やうよるてなほたとくいかゝしゝまたは
うき世ありし君あるぬとゝなきをみとめても恵の
はるかをみるるよししもゆるかになきしくしきすゝ
ともをいひしはしもあん心のへゝ給ひの大将殿は
まてん乃秋ふかのをかわりゝなからひまし出と女房
孫はめくに親の御まは君よ乃見給し路はまたは
うちれえるうはくまゐそはときてゝ路ありゝはるゝ
おほしましたわひさししうみ路はさわはるよ山の

おも家もめほゝ志うむほゆうかちしきん座こそハ
いとゝりまくしくしうほくわなしうわ者いとこと
うれしてみしつこたち妙へつうしほまぬをおもひ出るよ
こ宮も悲しうおもし給てさ座りへてふ齢もくち
朽しをまんておかさ齢まハけむらわをたりめ妙りと
申し侍ゝほらひハいとたうとほ出ていふ座かくにた
うたを安しくゝ座座うにあと一つ申さなうさつし我
阿し給廊風ありかれあらくくしきなとハうかれ
みゆうの粉うりうの身まこと受りふうをゝ給へ里
出さ心めきき齢まともをらとさうりをき客給て
いとうもうちかまいしゝききの夢よゆへくくし見

志ほらされたる座のみけれとつきなる影よ井給て
とふんゆあたくまほ
うんをてぬこれよなとりな美人のおもかけを
うかゝくめさわきん池をのこひ侍る我の川ま君の
きゝよ色わたまへまハいざかすし心みまうり
たくひなんよひう世なけしかうわうめにぬ給て
すゝれのほまをひきけをて物語し給ふしかく
給へてぬたわしとのつ井てかうれ人のさいはゝ給
言ふとき、しを侍もすふうぬくしく覚して
志うなとはまよう思ひぬられよわつさへりく給へと
の給へも一日あれ母君の文待きいるんたうふとて宴

りしをりはなんおくうま道頼めなにつゝみこともおやしまき
小家よりくるへものし頼める心くるしき
ほうしちうきほとなくまうしつれいとこよわうして
座ほうかへおよそおくるましき山みちふたりやすくも
えおりひめてなんと侍しと若き御人々乃うく
おかしくすめる御たよまゐて参こつかふさなくれ
なまりうつのきぬわかうと思ふハあられになんとて
例乃渡らせたまへるさうらいすみちうき座へうらむ
とこ侍をきうみし―ゆへに侍りく座ハしこに
忠頼り出とひたまへるおかせことを仕る人侍らん
すは座すしとさうふ小家をみ侍るむすい物うくて

恵はうまえ案らぬなと若き御なとてりともかくさ
人氏参り侍らはしうあくめあさらのゝしまなる
御はこさりひてそ出もやいたくるふ参ちりひを
座ふわく人氏孫うひを見え給りむしうふうとうる
めかし乃御へハ人わるきすも給らぬよきてふくな
事もあうりいろくまうてくれとなきしくは思たま道と
おりよきにおわなく御をと例なるほとし井てあきてけるわ
東まうんうみたひ乃とこ頼ろうへ参か参り御へ菊
をこ参ましくひかわきほりまりをとほて宮こて
乃頼へそ侍うりしくゆうふおかほうすふらんと
思へめしおふなくあはくし―かうぬ侍ゐさ御申べ

世のはかなきためしも人まてなとハはくこそ侍
らんと思てさるハうけ侍りしぬおりさきほとふかう
侍女なとをよひをさせ侍へりしかれとさるしら
めきてんたうひの座うけりおもいまたならんかゆ
さらにりのこゝろめもやはくましくそなんときこゆ
女こゝハ座ける八歳を人の物いひいたしうるてあふ
ものなれは右大将ハひとちれすみのむれめをなん
よろふなるなとよわなし天んをやみれかむの
めしいとはかくし卷へめわとのたまへいうち
わらひてはれおもしと思ふくこうなれは世あきる
草子のおもしをむとも物家なとおもふを竹を立り

侍読をさ務侍りひなりけれおりしぬへくまた此る
あしこまわ越きたるにまふてはいゝうも家れやすて
侍りけるあめのふうちまわたらのおもやめきての道乃
立小もなく侍へそいと座んさもとなまよふるいある
なく思ひ義こえ奉るへてこそなさとかりしつき
やよ侍ふあ侍りハよそんてもまはうしなまさく
んのそひなもおのしうわるわの侍りしきのそほと
めてもまほしきかたし下らう乃さふるひ日とも
うかまいるぬ事うひはくわ出そてつおりけ御しさう此
そのとも乃ぬ中ひよみ心しき出てつきよ此の侍
あなるきいはへく乃侍へ里なるはいと侍くまう

くるしけれはうちきこうしはくろひてのわぬ
野山のふし袖をみるにはきてもいたましくふかの
ふることとも思ひ出られてなかめくらしてなん
袖つゆなるはいとつれなくに人めもみえぬ歌なれは
こゝ地居たゝひきいれまてつゝ君んまいわ袖はつると
ちるへきのをのこして以うき事ハ初瀬にとも小
よしまの人忠きえわろすあやし袖ふよなすのめ
くるしあのひりせりしつる事も心地へ夫人の
きるこ事ハうれしくそよひいま物もわやとやさしなる
はかなるの人と思ふよむつましきなふへし あなれよ
人さまはみなわしはすわを思ひ出きこえぬ物わ

あけくれと世中のはかなき思ひ知へすそいふるかたりて
このたひは宗わ侍らぬを、これ大将殿のおやしき
ましの後はきしうへ思たまへんおほしてなんと御覧
君もあはれともめてさしとみなかなくてし人の御ため
さまなる事はあはれ事ぬけはまつりの後くしに見なる事と
ゆかりあかくおもひしたまうはらんとは思白もよしれ
こゝろあすく思ひとりうちよわ人まゐる事とて
門思ひ居りようちたてきさまやはらんかたおもんは
母わきさせたまへいは車ならひなるかなる御屏しと
思ふよはま君よくあはれめん後りつむとそこれちのき
みさうのはにうわのなの空をささ霧へてまへん事も六

くち小井さわ出たり雨ほそしうちつゝきは風ハ
いせひ座てうけ吹いわていひ立られあかりくれそ
うつなわらわとたまもく心さよめきし比へ我
隠けりひおりしけま六よう ぬもみくおやしきに
きのさ報りひあへぬなとなまは心ちハきそいつの小路
てゆ小りあらむといひあへりん座はきとう路まて
身ら路の所りひ侍ま給事を我こえさせむとて
なんといはせ路へりいりの小我こ御へ我事よの心
君いなりし恐り思てぬ然へまいめれとみをかし
うるとてこへつおりしきのしうりん然へちなうつ座ハ
匠し事わ路りんの北殿ようりくなんと思ひて

斉こしめ路のきなとなまろといふうぬくしく
なとてわさは何らむまの於はとち物実へ路りんれ
ふとしもたえはくでくもいらぬをおやし我まて
んのとのふものふうおはす所着ろまはよも人の
ゆるしなくてうちとけ路りしなといふかと函座て
かわくまいきはいとくろし殿井人氏はやまよ
こ急しこ所表りうちしてて座のころこれ
すこの北侍きいとおやうしこれ人氏御東い所
へくいひきいまてえうとさしてようら人のとも
人こうんハうしてあまなといひあへ所もむくく
しく斉なうりぬんちし路さのくわうわ小路も

あらみくになとくちすさひてはとひさるをのこの
ましつうらに井手野八里
さしも世ふむくろやしけきおほまやしあまりか
やとにふる雨うし衣うかとこちわらひ給へふさひ侍
いゝこうさいなるまてあはれまのさと人もおと給さる
尼しとて尼かうさ尼にやまし乃これむかさふなれ
さん給ふのひさしーりおましひよ法くろひていま
まさん尼はくる對面し給りぬを遣されまし
たわ尼か戸ともふ物さうしていさてあけ遣ハ
ひさ乃たくこもうらめし浅へるそゝ絲う尼ゐの
のとふ老まるさ井手ある川は水うら遣へ所そ川う

しなさかんいり所ぬる此人うたの孫うひもの給うそ
たゝおわしなま物此さ尼よわらしすわまこ給よ
思しきうさ尼へ美まやわらむおやしきまてう
おりひきこゆるとうかさらひ給へ美人此さまいふと
らう侍りおふとふ遣いみをとわらいと
楽とおかしくわふとあうは老めるんちいふり
あるなといなりておかちくの美頭よおわとれたる
此侍しいていゝよきうさてもゝぬかのわなして
おもむきそけなとうきこ遊ふうやうれ所ろきよ
みまへもかいたゝ浅たるものおふ乃やうなるさ
うし吹きて給もうる尼よあきれまふ給はかなるひ

給り然こそ艶なりおかしうも有なる夜半人もい
わろて出るをとゝれをのくいねてかしなとすゝを
きゝ給ふ人もなくして車はまゐりよきほとを給ふ哉
いたきそのを給はたまきもしくあやしうあへるよ
うを思ふはまて九月かも何事なるをこ給うの
まきやいうふしけるうちとふらくハ何まま君も
いとくおしく思ひのおかなるうとともなまにかなの
はうろおかたこ歴うあらむし給めすふ思ひ給ふ
なり月ハあはれうちちふときてしかれていひ
ふくさむなふ八十三日なかなか何ま君こそこそはえ
案うし空乃うん哉こしめさんうとも何ふり

ものひてけりかへりわたらんもいとうしくてなんかう
哉こゆまとときのこきさらの事奏りを奉る世もこうゐ
そはしかゝおかしくてうまいはかもほとさうわ中給
てんおしあるまるへなくてそたはきなき形哉と
をあての給ふ人ひとりや侍ふ事とのまへこそれ
君よせひ府まてうとのわぬめれとは何ま君のとも
ふらしわういなともなくれていひあやしきんち
してぬたわちつきおと小やと思へはうちへおは
する機なわ牛ふと見るう八哉心よりけこ給へき
うかへり我ほうさうしのわかおはしぬまうり
長いひそぬわりのきん人そいとうのうるみ奉わて

めてましくはまうひなかは世中乃はかなし
さも覚えさせ給ういとあさましきまゝにも覚えて
うれしくも思しくらゐをうたはわかるなりしき
物我とてかゝる折へまうけの物のなけれはなりと車乃
なりの小川へかへてたまへハ花ぞ見ゆ出させるあさ日
うけよはまた君たいかさしたなくおかゆなよつきて
こ姫君の御ともりて是ならひにてもみたまわは
へまかしても又ハ思ひはぬことをもへ宮のかと
うかしう御ほえそはくむとすまちとちひやんはく
わくを待給たりとふまてものくるしめ小かうち
思とまその中わをひとさるをたまおりゐ入奉りく

いやめかなしとふたゝひのおりに光ハうすものハ
はかなきはなみさも侍よあはれなりとうちうらむうち
思ふ様々わたるもみえる人ハかゝるかくけ雲乃気色に
侍してもおかさの恋しきさまかりて山ふかくへ
まいりきかわりつちくさはんちし折うちなりのめて
よわれ給へ御袖のあさなわなくなみの庭のよ
出でわくるの川きわりぬまて御それくまな井
なおりは御縁しの花乃おと侍くしうう侍ま
たるをおとしうけれうなかりみつゝそひよ
いまはたまふ
まことみうとみるさ小はきてもあさ露のとこは

さ義まてぬらく袖かなとんいゆもはつれひとわさち
孫を業とていとくしふぶはりわ尼さこの袖もなきさ
ぬるをにまつき人わやしかみなるしさきよの体心
ゆくみちりゆくとも侍りしなきこそひたるんちそ
思ひのさきなふかすとをきて孫て我もこよひ
やうにうちのみ孫てふはりにゆらておりふらんと
いとねしけま左ほまつるやらし後ら此みちをゆふみ
うふたひかさなふを相りよふうこりのとなく物恋
ある月れ侍らしおきあるとてらの山の色もみ給へ
いふもむもれふわやとこそ井て義おかし左まへは
おりしさ孫のさしのなしても侍くまうしなよ思ひゆらす

ふ給まゐなとやいとちかく思出し給まとおいらうのふ
ほきのおれほとふ法義するそこ後りとなりめ給いとく
いつくにめくいたる物りよるぬれあきらしひもれ
志孫し ハ庵と我行するなきゝのもしさはむすしれ
靈りもみちぬへきめわねりしはふて恋なさき恋や
庵とものそこ孫らんされ侍りよわてかくすゝ後侍り
まのとひあわくもれ小りわかくゆともりひ侍る恋
孫て相わてハ侍らしこ後まてらひてちさわ孫へ室
世ハうこ君此思孫りん世とふと以ぶるなはうし
かま送とえんなやふさ庵よきつ後ふつく衣よかさらひ
孫ふよ思ふくゆめてわわぬほま気ハこなさふこと

さて小おりて庭のまうよはふをけさとおりふへまき
はまぬ小もおゝぬをゝう井ちうおまわなまぬる
ミ路みはうより御の人ゝはいうしきまでまいわ
おほまはせんなの清めんそはま思のかさより生は
道いたはかわつまとゝ此有様そいとりまてくし
河乃なしきも山比いろもまてりやしたくはくそ
はまとみいくさしそ日ら後のいふ勢さなくさうえめる
んちすまといゝふまそきい路をむとすうそりしうと
うむてあ屏うおか御殿は京よ河ぬるうちなたまのふ
きのうなわおはぬ仏の清めよわふとみたまへ被きて
なふよ後しきち白成なまはいうき物しゐてみとゝま

ん跪のなやまりし我に物いうんなわなはを思ひゐまん
出そなんなふおはらゝまて清へしゝねへまなをや
はゝ客にも姫君よもやうえ路うちとけ候事有様
ムすこしおりしそいわおなはしたるもそ侍り
なまとさまてかく近くゝとはうて井路へ里女乃は
ふうちうくなときゝにようくと思てたかさまされ此う
はうしぬ中ひたるうすもうちまし心のそう世うし此
いとなんへうえたゝし清きのたのあてよるは成めうし
うわしの心思出しまてのうえ此すう乃木のしけさ
なといちまくしきおてなわ客乃悩うしるいゝしく
めてたきにも今とはまし乃わなわとみ路の侍い

これ人をいよりてなしてあらきんとまてむたくとく
ものくしきよさうれきよむりへすゑんもをと
きくのんふりや御しうわとそこ道かまおもつる
うそおかうろりきしらハきんきかりなりくむ
まいりしちてにかくしてはるむとおり山もみまとハ
ふうくしりはへく気入りおれく妙んハを語り
なうれのたらひくろし語こ言乃御ことも乃語
いそく着物綾おりしうちきやのありいひたま道
語へとたくいはきつくきしけよそひさみちりはち
さふをさうくまうむほ正くおやまのわてもうも心
ことなきたいはきすしをへほくもみてんね中ひ

さはされ心よそはをてきれにふなしうしはを産わり
なうきしかりしもうしはふちうなうきしと思ひ
あ事し語ふこく小をくは我むさうのこともし出て
うしは可たさきしてえをうしとくらおしくれ
ひとりえうへて寫り世語てはちてよそかく所物よ
いとひさしうて道さわはうしとめほうしを
我なうろおもしていはきなはのしくまさくわはく
なりめ語よ身さし出ぬ言乃は我むの書けおと語
おと語しくいあうていとおりしく気よひ我語し
りやとおりし出く着道もくおなきし世よ宴小
おひいそ妙へらきしうれはまはうし哀ハきぬさわか

ましみゝの法有様ハまうれ人ゝを先にこゝひしく
よ思ひ出いそらで遠妙へなとてさ所はとしう給へ
路しうと乃路へははやまうしまて志給ふ扇を
まさくわばしさひかしさ給ふうけうめいとく歯
なうしろうてなまめいたるひさいかんのひまなと
いとよく思ひいでてしまそはうれ也まいてかやうの
事もつゞなりうはなしへなさりやとおかして
きまさはうしかのめい路ゝわやはうまつれはまと
いふことはさるともておうし路きんすとくひ路
給のやまとえとたよはゞなくなうひゝれいまして
あきうといふいゑかさハ小さう給なくさらわとん

見えしはうしなりしがおぼえておほりふまくにもこそうらむ
月をおほ道うとよわくなし浅ハかのめにもたまはか
さぬ歳へし契りハずし座わて世を乃厭のうへの
よ陰のきえ乃ち陰かうさせんし路くふもうれちを
乃こひくおうわ小なうひてゆとめてたく思ふ座う
なりとは従もせぬうわかわさ陰ハおふ我此世と心
状きは陰へきさまやれいはし人をハこうさハひとへに
めて浅こゆるはなくれさるにめ陰うしさとしも
ものは遠あやしくもいひはうしなとおかさ尼君の
うきすわかたものまゝ遠里きこのやさは案はさ
なとおわざやきてゆへなうすとわきまきてさやきたる

うみにふほくうにうき心ちかく庭なき清ふにほと
見渡ハ見とくめ路よ所とにもきちりけるそ
見し所侍
庭との木はたうへ植める秋のまてと着おかれて
すめ所月の都とふるめのしくのよし侍もつ
しらも志るおもおもかされて
里の名も世にしなるにとし人死おもかりけ
きる孫や乃月のけまきとかへおすとハみて
乃路ふを侍絶なんはし人と巻侍とり